

石製農具の使用痕研究

原田 幹（愛知県教育委員会）

70年代後半以降の石器使用痕研究は、高倍率法と実験使用痕研究という二つの柱により進展してきた。日本では、旧石器や縄文時代の石器だけでなく、弥生時代の石器に対しても関心が高く重要な成果をあげている。本発表では、イネ科植物を作業対象とする石器について、研究の現状をまとめ、弥生時代の農耕技術と石製農具との関係について考える。

イネ科植物によって形成されるポリッシュは、Aタイプ及びBタイプの光沢で、明るくなめらかで縁辺が丸みを帯びた特徴的な外観を呈する。ポリッシュが極

度に発達すると、コーングロスやシッケルグロスと呼ばれるような「光沢」として肉眼でも識別できる。弥生時代の農具と考えられている石器には、大きく三つの使用痕の分布パターンが見出されている。パターン 1 は磨製石庖丁などに特徴的なパターンで、主面の片側に偏って発達し、刃縁の線状痕は刃部と直交する。いわゆる「穂摘み」によって生じる分布パターンである。パターン 2 は、刃縁の表裏に広く帯状にポリッシュが分布し、線状痕は刃と平行する。刃部を平行に操作することで形成される分布パターンである。大型石庖丁や大型の剥片石器に認められ、植物でも根株など厚みのある部分での作業に用いられたものと考えられている。パターン 3 は石鎌で確認されており、刃縁の表裏にポリッシュが分布し、線状痕は刃と直交する。対象物に対し刃部を直交方向にたたきつけるようにして切断したと考えられ、穂首の収穫作業が想定されている。

パターン 1～3 の組合せは、北部九州では弥生時代早期には成立しており、水田稲作の導入初期に確立された組成である。ただし、石鎌は北部九州から山陰、北陸にかけての日本海地域を中心にみられ、分布範囲は限定される。一方、パターン 1 の「穂摘み」とパターン 2 は東北地方までの広域に定着しており、弥生時代の石製農具の基本的な組成であるといえる。従来から想定されているように、「穂摘み」による収穫作業が行われたと考えられる一方で、稲株の処理や除草などの作業についても、弥生時代の農耕技術のなかで積極的に評価していく必要がある。

しかし、北部九州や近畿地方ではパターン 1 の「穂摘み」具が主体であるのに対し、東海や北陸では「穂摘み」具が少なくパターン 2 の石器が主体であるなど、地域によって機能的な組成に偏りがあることも事実である。また、磨製や打製といった製作技術、生産と流通をめぐる様相にも地域差があり、弥生社会のなかでの各機能の位置付けが十分に解明されたとはいえない。

石製農具の使用痕研究の課題として、客観的な観察基準の整備や比較対照する実験研究の枠組みの再検討といった分析技術に関わる問題も指摘しておきたい。このような問題を克服したうえで、縄文時代の石器との比較や弥生以降の鉄器への移行について機能的な側面からその変遷を明らかにすること、また中国大陆や朝鮮半島の石製農具の分析をとおして、多様な農耕技術のなかで個々の石器の機能を位置付けていく試みが必要である。